



## 「訪問客」とともに

小原 比呂志

「世界遺産登録以来、観光客が増えて、屋久島の自然を荒らしている」のだそうである。ある人が、屋久島旅行にあたって、会社の同僚から「おまえも世界遺産を荒らしに行くのか」と責めるようにいわれたという。

世界遺産登録当時、縄文杉に集まる人々の映像は、「観光客悪役論」のシュプレヒコールと共にマスコミを通じて全国にばら撒かれ、そのイメージはかなり定着してしまったようである。同時にこのイメージは地元屋久島の、観光化への不安感を刺激し、「押し寄せる観光客」への嫌悪感となってことあるごとに噴き出すようになってしまった。

屋久島ブームを足場に高速船トッピーが就航したことによって、ここ数年、屋久島への訪問客は年間15万人まで増えて、ほぼ安定している。これは1日平均411人、仮に1人2泊3日間滞在し、2日間をフルに使えらるとして822人。縄文杉に100人、ヤクスギランドに300人、白谷雲水峡に150人、あとの270人程はレンタカーやバスで広い島内に散ら

ばる。それでおわりである。確かに観光地ともいえなかった時代に比べれば「増えた」のだろうが、本当に「多すぎる」のだろうか？

入り込み数は、飛行機やトッピーの座席数という実質的な入島制限があるため、ピーク時もそこそこに押さえられる。ゴミ問題や、尿尿問題にしても、単なる感情論ではない冷静な分析・検討はどれほどなされているのだろうか。

むしろ、観光客を悪と決めつけてしまったことによって、悪いものには金を出させて当然だといわんばかりの風潮が生まれ始めていることのほうが深刻な問題だ。日本各地の様々な事例が示すとおり、安易なたかり型観光収益は、地域の品格をそこなわせ、空気を卑しいものにする。行政機関も民間もこぞって財源の取り合いに走る様では、自然と人間の共生が聞いて泣く。

屋久島の森は人間が作り上げたものなどではない。人間がかなり無理なことをしたが、森が自らの大いなる治癒力によって復活してきただけである。自

分の努力していないものから利益を得るべきではない。そうではなく自然に惹かれてくる訪問客に対し、地域の努力で作り上げた質の高いサービスや商品を提供することが健全な観光業の筋道ではないか。「観光客が増えて自然を荒らしている」というお題目は、地域にとって百害あって一利無しである。すべき仕事が出来ていない行政の言い逃れにすぎないともいえる。

私は「観光客」ではなく「訪問客」ということばを使おうと思う。15万の人々はたんに観光に来ているのではなく、屋久島を訪問してくれている、と考えると、こちらの心構えがぜんぜん違ってくるからだ。従来の「観光」ならきれいな景色とうまいものを用意しておけばなんとかなるだろうが、「訪問」となれば物を言うのは地域の品格そのものである。どうしたって、受け入れ側が地域そのもののあり方を考えなければならなくなる。口先でとりつろったとしても、訪問客との付き合いのなかではすぐにばれてしまうのだ。

# イカの愛

浜崎 ひろみ

## 【プロローグ】

突如目の前に広がるウスサザナミサングの大群落。私は今、息を殺し、彼等がやってくるのを待っています。いつの日も私がここにやって来たことは瞬間に彼等に知れてしまうのです。彼等の目って一見いかにも眠たそ～な目をしているんですよ。だけど実は無脊椎動物界NO1！を誇る精度抜群の視力の持主なのです。すばやく私という未知なる危険を察知するや否やひらりとその身を翻し、このサング大群落の裏側で、「じへ……」とこちらの様子を伺っています。ああ、私は彼等に見られているのです。ドキドキキキ……と、一瞬、背後に何かの気配を感じ、私はハッと振り返りました。うわあ～っ！ミルク色の大きな円盤型生物が、ゆら～りゆら～りと私に近づいてきます！それが合図だったのでしょいか、気がつくとは私は20以上の巨大な白い円盤にこり囲まれているのです！！「ブクブクブク……」興奮した私の口から熱い吐息が漏れました。いよいよこれから自分の目の前で壮絶な生のドラマが繰り広げられるのです！そう思うと、私の鼓動も一段と早まり、全身の毛が逆立ちちゃいました…だけど「そのゲ～ッ！炭火で焼いてフンドーキンの甘口さしみ醤油、じゅわっ！と垂らしてハフハフしながら食べちゃいた～い！！」とも思わずにはいられません(微笑)。

## 【イカ界】

彼等はイカです。イカは魚の様に浮力を得る為の浮き袋を持たないのですが、そのうちコウイカというグループは背中に石灰質の貝殻でできた甲羅を浮き袋として使っています。このコウイカグループでは外套長(胴体の長さ)40～50cm、体重10～12kgに達するイカの化けモン！、もしくは、宇宙人かも…という風体をしたイカがいます。その名は

コブシメ

これが今、私の目の前にいる宇宙人達の名前です★

## 【THE・コブシメ】

コブシメは従来の図鑑では「奄美以南の西太平洋の海に広く分布」とありますが、この屋久島の海でもりっぱに繁殖しています。その白い円盤形胴体の淵には、ひらひらしたレースをまとっています。漂う時にはそのレースをひらひら揺らめかせるのですが、それはまるで少女が純白のスカートに春風にはためかせるかの様です。また高速で移動する時にはそのレースを体表にピッと折りたたんで、漏斗という筒からドビュッと水を噴射させるやいなや時空間をワープするかのごとくすっ飛んで行くこともできます。

普段の体表はミルク色で多くの青黒い斑がランダムにあります。この体色は面白い程ころころ変わります。例えば産卵絶頂期の雌は産卵期始めの雌に比べると、興奮度の違いからかその体表が真っ黒になります。そしてその間夜の様な体色にいくつもの青白い星がすっつと浮かび上がります。沖縄では月明かりの中、海人(うみんちゅ)が鉤を手にもって、暗闇に浮かび上がる星を突くのです。そうして捕えられたコブシメは刺身や墨汁(イカのぶつ切りと豚肉などをグツグツ煮込んでイカの墨を入れた汁)にさせていただくそうです。ジュルル…

また、雄の体色は雌の産卵を見守る時などはまるで雌と同調するかのごとく同じ体色をしています。ひとたび他の雄の乱入で恋のバトルが繰り広げられるとなると雄同士の体色は瞬時に白黒まだらの縞馬模様と化します。これは威嚇のサインです。その色は凄まじい勢いがあり見るものを圧倒します。

そんな彼等の姿を今年(2001年)屋久島では4月1日(水温21℃)に初確認しました。沖縄では冬から春にかけて産卵しますが、屋久島では少し遅いようで、5、6月をピークに10月頃まで産卵が続きます。

沿岸のサングに集まってくるのは、性成熟したコブシメです。ここでコブシメは争い、奪い合い、愛し合い、そして卵を産むのです。

コブシメの寿命はおおよそ2年であろうと言われていています。産卵後、余力のあるものは次の産卵期まで長い旅へと出発します(その行き先はまだ解明していない)。力つきそこで命果てるものもいます。

コブシメの存在は広く知られていますが、その生態については未だ多くの謎に包まれています。その謎解きの鍵を少しでも形作れたら…と思ひこの文章を綴っています。

## 【つかのまの恋人たち】

コブシメの愛し合う行動…「交媾」はまず雄がその10本の腕で彼女を抱きかかえるところから始まります。雌も雄の好みがあるらしく、またそのタイミングもあるようで、そう簡単には事に至れないようです。雄が「ねえねえ…」と遠慮気味に雌の体を触ります。その時雌はその気がなければその腕をスリリとかわしてしまいます。運よく(?)雌に気に入られると、雄は10本の腕で雌の腕側からすっぽり抱き込んでしまいます。2匹の計20本の腕が絡み合う中、自分の精子の入った「精きょう」と呼ばれる命のカプセルを密やかに彼女に渡すのです。



めでたく交媾できたら雌は産卵床探しを開始します。雄はその後をびったりと寄り添ってついていきます。せっかく自分の精子を渡したのですから、静かに産卵してもらわなければなりません。またあわよくば産卵後の彼女ともう一度愛を確かめあおうと、必死についていきます。

### 【略奪愛】

と、突然、近くにいた一匹の雄がこの恋人達との距離をググ〜とつめてきました！なぜ雄だと思ったのか？だってカップルの中に割り込んで来るなんて、どう見たって美人の彼女狙いの邪魔者にしか見えません。ふと、このカップルの周囲を見渡せばいつでもその美人の彼女を襲う気満々の若くてイカした雄ども(笑)がウジャウジャおり、恋人達(というか雄の隙)をじっと伺っているではありませんか！キヤッやらしい！(笑)さて、イカした雄Aに気づいたカップルの彼氏は怒りました！瞬時にその背中の体色を黒白縞縞だんだらゼブラ模様こパッと変えました！それも

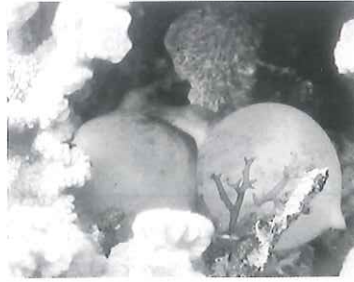


背中の中心でくっきりラインをひいたかの様にイカした雄A側の面だけです。するとそのイカした雄Aは負けじとその白い体色全体を黒白縞縞ゼブラ模様になすと変えました。この模様が「俺をなめんよ！」とか「俺の女に手を出すな！」とか「×××！！」といういわゆる威嚇のサインです。美人の彼女欲しさに彼氏に挑んだイカした雄Aでしたが、すぐに「ちっ、覚えてろよ」と捨てゼリフを吐くと、ねちねちカップルから離れて行きました。負け犬です。つまりこのカップル、中睦まじいというより彼氏は常に彼女の傍にいないと寝取られてしまうという深刻な危険にさらされているのです！

### 【産卵】

その間、彼女は自分が争いの種になっていると知ってか知らずか、ずっと産卵床探しを続行しておりました。雌は一つの命が入った卵を産むのに最高の場所を念入りに調べているのです。その調査は真剣で、かつもう夢中なのでしょう。ついには私の鼻先まで近づいてきました。

そして、ようやくお気に入りの場所を見つ



けたのでしょ。しばらくその隙間に腕を差し込み卵を産みつけています。雌が腕を引き抜いた後そつとそのサンゴの隙間を覗いてみると、白くてほんのりピンクがかかった卵がひっそりと輝いていました。大きさはピンポン玉をもう一回り小さくした位の球形で、先がちょびり尖っています。

産卵は約2ヶ月間、昼夜を問わずに行われます。1匹の雌から生み出される卵は1000~1500個。最初はボツボツとしか卵が見えなかったサンゴですが、1ヵ月経てばその白く光る卵で隙間が埋めつくされてしまいます。

### 【闘争】

産卵後、雌はずつとその場を離れました。すると、待っていました！とばかりに彼氏である雄が「俺と愛し合おうっ」と勢いよく雌を抱きかかえ様とします。産卵直後の為か疲れ果てて見える彼女は「嫌、やめて…」と素早くその腕をかわします。それでも彼氏はあきらめません。なんとか彼女をギュッと抱き込もうとランデブーサイトであるサンゴ群体系から離れ、誰にも邪魔されない静かな所へと無理やり押しやっけてゆきます。しかし、取り巻きの雄達がそれを黙って見守る筈など当然なく、こぞつてそのチャンスを勝ち取る為、雌の後を追ってゆきます。その思いは皆一緒です。そう、「愛し合おうっ、俺と！」です。彼氏の一瞬の隙を突き一匹の雄がグイッと美人の彼女に詰め寄ります。けれど、彼氏だって本気で怒ると怖いのです。「わしの女に何さらしとんねん！」全身を迫力満点黒白縞縞だんだらゼブラ模様こパッと変えるとその背中をグオ〜と乱入者に突き付けます。興奮の為か皮膚がイボ状に突出しています。さらにその腕をグオオオ〜と振り上げ「なんじゃ〜コリヤ〜!!!!(松田勇作風に)」。相手の男だつて彼女欲しさに必死です。「ううううおお

おお〜!!」と同様に応戦。さらにデットヒートするとその腕でカッと取っ組み合うのです！この場面、テーマソングは「ロッキー」ですね！(笑)

### 【略奪愛Ⅱ…そして】

そんな混沌とした場面の中、闘争の為彼氏のガードが薄くなった彼女をこぞとばかりに奪いにかかる頭脳プレーイカがいます。こんな風にチャンスはあちこちに転がっているのです。この雄、まんまと彼女のハートを射止めた様です。哀れ、彼氏はまんまとこの頭脳プレーイカに彼女を寝取られてしまったのです！新たな雄を品定め、「あら、いい男」と彼女は目を細めました。かどうだかは解かりませんが、この雄は恍惚とした彼女を抱きかかえ、その腕を絡ませ密やかに愛を営むのでした。

こうして交配が済むと雌は再び産卵場を探し、そのあとを雄はしっかりと雌に寄り添いついてゆきます。

### 【エピローグ】

産みつけられた直後の卵は乳白色をしてピカピカ光っています。孵化まで約80日。日数を重ねるにつれて卵は透明になってゆき、中でスクスク育つ赤ちゃんコブシメが透けて見えてきます。その姿は「まあ、お父さんそっくりねえ！」と叫ばれる位、親とどろりふたつです。孵化間近の子供はすでに貝殻(甲)も持っており活発に動き回ります。ぴっくりするとビュッと墨を吐くこともあります。卵内真っ黒！しかしその墨もどう言う訳かしばらくすると消えてしまうのです…

孵化は決まって明け方に始まります。孵化誘因の一つはどうか光の刺激にあるらしいのです。浅場に広がるサンゴに守られ無事孵化したコブシメ達、人目に触れない深場へと旅にでます。その旅の行き先はいったいどこなのでしょう？そこでどんな暮らしを営むのでしょうか？そして十分に成長し成熟すると、再び繁殖のため浅場のサンゴを目指してゆくのです。私が彼等の生き様を覗かせていただいたこのウスサザナミサンゴ大群落は、コブシメ達にとっては次世代へ命のバトンを引き継ぐ為の数少ない貴重な場所だったのでした。

# 「もののけ姫」考

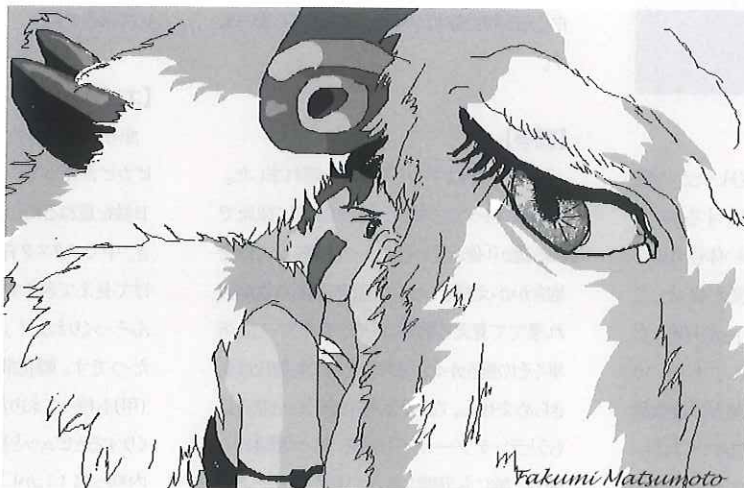
松本 毅

1997年夏、宮崎 駿監督のアニメ「もののけ姫」が公開された。それ以降、「もののけ姫」を見て屋久島にきましたという人が増えた。これを我々は「もののけ効果」と呼んでいる。ところがどこで誤った情報が流れているのか、屋久島が舞台だと思っている人や白谷雲水峡がシシ神の森だと思っている人が意外に多いのである。しかし、これは誤りである。

この映画の中ではいっさい具体的に時代や地名については出てこない。その意味では、「風の谷のナウシカ」が、1000年後の未来を描いたのと同じく、「もののけ姫」は今から6~700年前に遡ったのであり、決して歴史物語を描こうとしたものではない。「もののけ姫の秘密」(久慈力著批評社1998年)で「エミシの隠れ里を秋田の白神山地と設定しているが、アシタカの先祖であるアテルイの一族が逃げ込んだのは、岩手の閉伊地方で場所が合わない。」と批判している。しかし、映画の中で冒頭に出てくる蝦夷の里は白神山地であるとは言っていない。アシタカも「東の果て」としか表現していない。この批判はこれとして別の意味で面白いが、「もののけ姫」をこのような形で批判するのはあまりにも大人げがないと思う。むしろ、膨大な資料をもとに描かれたもののけ姫の世界は歴史的史実を再現するためではなく、より主題にリアリティーをもたせ、明確にするために必要であったと考えるべきではないだろうか。

では、もののけ姫の主題とは何であったのであろうか。まず、この物語り

の中心となる舞台は「タタラ場」であるが、タタラ場とは製鉄工場である。エボシ御前が築いたタタラ場は足踏みふみこ式のたたら鑪を持つ巨大な「永代鑪」であった。これはまさしく日本における重工業の始まりである。これまでに行われていた小規模の職人的金属精錬から大量且つ良質の鉄を生み出した。これに伴い砂鉄を採るために大量に山を削り、純度を上げる為の「カンナ流し」という削った土砂を洗い流すために川を汚し、砂鉄を溶かすための炉に火を絶やさないと大量の木を切って炭



を作った。自然を切り崩しながらの産業がここに始まったのである。それ以来、人間はどんどん人間本意の考え方で重工業の発展を続け、地球全体をも危機に陥れてしまった現代に至るのである。「風の谷のナウシカ」では、ユーラシア大陸の西の果て、つまり西洋で起こった産業革命が1000年後に「火の七日間」で大地を不毛の地にしてしまうが、「もののけ姫」では日本における産業革命から600年後の現代に対する問題提起といえるのである。

この重工業の発展のためには、深山に棲む神々は障害となってきたのである。エボシにしてみればなんともしシシ神の首を取らなければタタラ場は

維持できなかった。アシタカの「これ以上憎しみに身をゆだねるな」の言葉に「さかしらにわずかな不運を見せびらかすな」と切り返し、「古い神がいなくなればもののけたちもただの獣になろう。森に光が入り、もののけどもが静まればここは豊かな国になる。」とも言っている。何か戦後の復興、高度経済成長期の日本を思わせる。その結果、公害や河川の氾濫、枯渇、農作物の不作、漁業の不振など様々な形でタタリ神を生み出した。しかし、私はどうしてもエボシを憎む気にはなれない。私も現代のタタラ場で暮らす身である

からだ。私たちの祖先が繁栄を夢見てシシ神の首を取り、私たちの親達が敗戦後の苦勞の中でしゃにむに働き続けて勝ち取ったその繁栄と豊かさの中に生きている。そして、私たちは私たちの子供達に地球環境の悪化、精神の衰弱などとも明るいとはいえない世界を引き継ぎなければならぬ。アシ

タカは「シシ神は、傷は癒してもアザは消さなかった。のろいが我が身を食い尽くすまで苦しみ生きよ」とシシ神の判断を自らの運命と見据えている。この覚悟が今我々に問われているような気がする。

屋久島においては、このシシ神の首を取ったのは江戸時代に入ってからであった。泊如竹翁はエボシ御前であり、ジコ坊であった。屋久島の民衆を屋久島というタタラ場の中で繁栄と豊かさを実現するために骨を折った方だ。神々しい森から屋久杉を切り出すためには屋久島の森のシシ神の首を取らなければならなかった。山の神への恐れ

を解くために山にこもって山の神から許しを得、人々にもう恐れなくてもよいと説いた。以後、島津藩の年貢としての擧りたて、明治政府の国有林化、大正から昭和への伐採、戦後復興の屋久杉や照葉樹林の大伐採へと屋久島の森は切られ続けてきた。屋久島の神の記憶は時代の要求に飲み込まれ、時代と共に次第に薄れていった。これは屋久島に限らず、日本全国でおこったことである。宮崎監督は「もう殺してしまっただけです、神様を。森の奥に住んでいる神様を日本人は殺してしまっただけです。でも殺してしまっただけは、忘れないほうがいいと思います。」と言っている。屋久島の森は、幸い切り尽くしてしまう前にその価値に気付き、また地元の自然保護運動の高まりによって、特別天然記念物「屋久島スギ原始林」、環境省の国立公園・原生自然環境保全地域、林野庁の森林生態系保護地域、世界自然遺産などなどの指定により守られることになった。しかし、「甦ってもここはもうシシ神の森じゃない。シシ神はもう死んでしまった。」とサンは言った。確かに屋久島の森は厳密には原生林ではない。いたるところに見られる切り株はまさしく屋久杉の墓場を連想させる。前岳を埋める緑の多くは本来の照葉樹林ではなく植林された杉林である。私達はこの事実を眼をそむけてはいけぬのである。モロはアシタカに「お前にあの娘の不幸が癒せるのか」といった。この絶望的

な問いにアシタカは「森とタタラ場、双方共に生きる道はないのか」と苦悩する。この苦悩こそがこれからの世代に問われているのである。

首を取られたシシ神が凶暴化して森やタタラ場を破壊しはじめたのを見て、甲六は「もう何もかもおしまいだ。」とつぶやいた。それに対してトキは「生きてりゃ何とかかな。」といった。自然を切り崩してきた人類の文明や地球環境の悪化を嘆いていてもどうにもならない。「甦ってもここはもうシシ神の森ではない。シシ神は死んでしまった。」というサンに対してアシタカは「シシ神は死にはしないよ。シシ神は命そのもの、生と死と二つとももっているもの。私に生きると言ってくれた。」と手に残されたわずかなアザをみる。そして、「サンは森で、私はタタラ場で暮らそう。共に生きよう。」と言う。エボシは「みんな、はじめからやり直した。ここをいい村にしよう。」という。

誰も決してタタラ場を否定せず、アシタカは、手のアザの闇の部分を持ち合わせながら、しかし前向きに生きていこうとする。サンに会いに行くともいっている。そして、サンはうなずいた。

アシタカが死の呪いを受けて自分の運命を見定める旅に出ているが貫一貫して言っていることは「生きる」であった。そして、その運命を曇りなき眼で見定めてきた。我々が産業革命や重工業で得てきた文明を否定することは簡単である。しかし、600年前に戻ればいいなどと言うことで問題は解決しないのである。我々はシシ神の首を取り、手にアザを抱えながらも前向きに「生き」なければならない。そして、少しでも住みよいタタラ場を築いていかなければならないのである。

そのためには、今こそ屋久島の森にすむサンに会いに来て、「曇りなき眼で見定め、決める」覚悟が必要なのではないだろうか。



## ミニコラム 森の分解者

持原 道子

ヤマモモの実がぼろぼろ落ちるほどに熟し、もこもこした樹冠のマテバシイがクリーム色の花を付け新緑の最終段階を見せる6月の西部林道で、死んで間もない仔ジカを見つけた。

その変化がどうも気になり見に行ったら。死んだ動物の分解過程が記録されている宮崎学写真集「死」、冬の馬毛島で見たマゲジカの死体の数々、市川から聞いた、秋の白谷雲水峡の10日間で骨と皮になったという死んだ仔ジカの話から、横たわる仔ジカがこのあとどうなっていくかは何となく予想していた。

しかし、実際の変化はすさまじかった。飛び回るハエが数時間でどっと増え、部分的についていた小さなウジが翌日には丸々太って全身を覆い、4日目ではぼろ骨と皮の姿になった。

仔ジカの腹部があった辺りにコロコロした1センチぐらいの塊がたくさん転がっていた。死肉にくる昆虫の仕業でこういうものができたのかと思ったが、手にとって見るとヤマモモの種子だった。甘く真っ赤な果実をたらふく食べたところで死んだということか。あつという間の梅雨の出来事。森の分解者の威力を知った。

# えびす オカダ屋久島 曼茶羅

## ★はじめに



女子崎エビス (A)

シーカヤックツアーで海に出るたびに、毎度顔を合わせる人がある。彼の名は「エビスドン」。屋久島ではエビス様を、親しみを込めてエビスドンと呼ぶそう。よく見ると、彼らは一人一人素材や姿形が違って、それぞれが非常に個性豊かなのだ。

これは面白い！と喜び勇んだ私は、港にあるエビスドンを撮りため、Y通のテーマにした。ところが、「エビス様」ひとつとっても奥が深く、とてもとてもそのルーツまでは調べが及ばない。しかも、歴史民俗資料館の山本秀雄さんの話によると、屋久島には百以上ものエビスドンがあると言う。なぬう〜！！私が集めた（気になっていた）ものはほんの一部に過ぎなかったのだ。そうは言っても、集めた16体は屋久島エビスの代表選手。今回は、海を見つめる彼らの表情を中心に、彼らが見つけてきた屋久島（漁業と人）を見てみたい。

## ★エビスとは？



女子崎エビス (B)

昨今のエビス様と言えば、おそらく七福神の列に混ざって微笑む、まさにえびす顔のおじさんを想像するだろう（あるいはYEBISU BEER?）。七福神の一人としての彼の役職は、「商売繁盛・福の神」。毎年新年早々行われる戎祭りは盛大なものである。

ところが、その風貌は狩衣（かりぎぬ）、風折り烏帽子（えぼし）姿で右手に釣り竿を持ち、左手に鯛（見出し下）。そのお姿から察するに、彼のルーツが海にあることは明らかである。

七福神は、福德をもたらす神として信仰される七体の神である。室町時代、それまで仏教や民間信仰などで福神として信仰されていた神々が、経典の「七難即滅、七福即生」

集落名	場所(基数)	素材	タイプ	備考
上屋久町	永田 永田川河口(3)	土・木(2)	A・C	えびす2、大黒天1
	屋久島灯台(1)	木	A	シロアリ食害あり
	吉田 吉田港(2)	岩	B	鉢巻をしたエビス
	一湊 一湊漁協北(2)	コンクリート	B	1体化粧あり
	志戸子 志戸子港北(2)	岩	B	祠が2箇所
	宮之浦 シーサイドホテル	コンクリート	B	朝鮮人風
	宮之浦港公衆トイレ下	金属	A	釣り竿を振り上げる
	楠川 楠川港(1)	岩	B	襟巻きをしたエビス
	楠川 楠川港東沖(1)	堆積岩	自然石	木杵あり
	小瀬田 小瀬田港(2)	岩	B	鉢巻をしたエビス
屋久町	安房 安房漁協(1)	木	A	
	原 原港(2)	花崗岩・木	自然石・C	彩色してある
	尾之間 尾之間港(1)	木	A	
	女子崎(国民宿舎下)(2)	木・岩	A・B	
	湯泊 湯泊港(1)	コンクリート	B	魔人ブーに似る
	中間 中間港(3)	木	C	えびす1、大黒天2

表1. 集めたエビス様の場所と容姿

や竹林の七賢などにならない、「七」に整えられた。ようするに、満面の笑みで万人の心を和ませる商売の神様「エビス様」は、もともと古くは「豊漁の神」を本職とし、漁民に信仰されてきた海の神様なのだ。

特に、すぐそばに海があり、物資の海上流通が活発だった大阪は、古くから漁業と商売の街として栄えてきた。海の産物は里の産物や山の産物と物々交換され、やがて「市」が繁栄する。そんなご時世に、漁業の神様が、「市（商売）」の守り神に転身したのだ。

## ★屋久島の漁業

屋久島は、周囲を海に囲まれた絶海の孤島である。江戸時代に屋久杉を切って生業を営むまで、島民にとって、海の恵みが生活の糧だった。古くは天明四年（1784）、「屋久島で飛び魚漁撈始まる」の記述があるらしく、現在も、島の東部にある安房港は日本一の水揚げ量を誇るトビウオの漁港である。



湯泊エビス (B)

明治時代中頃はカツオ漁が最盛期を迎え、島の南側を中心に近海で好漁が続いた。しかし、動力船の普及に伴って、

鹿児島県本土の大隅方面からも船が押し寄せ、海は精気を失った。漁場が遠洋に移ると、無動力船が主流だった屋久島のカツオ漁は漁獲量の減少と共に衰退した。

トビウオは、鯉の餌にするキビナゴ漁の網に紛れ込む雑魚に過ぎなかった。ところが、鯉の不漁に伴い、その雑魚が飢饉時の救世主となったのだ。こうして、明治時代後半から大正時代には漁獲対象がカツオからサバやトビウオに移行し、今日に至る。



榊川エビス (自然石)

### ★屋久島のエビス様

屋久島で、いつエビスドンが登場したのか分からない。ただ、海の民が自然と海の恵みに感謝し、その対象を「エビス様」として具象化したのは当然のことと言える。現在も、集落ごとの港や浦々に1つ、多いときは数体のエビス様が祀られ、今も変わらず人々の営みを見守っている。

屋久島の民俗 (1987) によると、屋久島のエビス様には2つの系統があると言う。鯉 (カツオ) 漁のエビス様は、鯛または鯉を左脇の下に抱えている。別に、自然石を奉ったエビス様があって、これはトビウオのエビス様だという。これでいくと、今回集めたエビスドンのうち、ただの丸い石 (2例) 以外はすべて鯉エビスと言うことになる。

しかし、何と言っても面白いのはこの鯉エビスである。確かに左脇に鯛 (鯉) を抱え、右手に釣竿を持っているように見える?つまり、規定のスタイルは網羅しているが、すべてが同じ素材で同じ顔ではなく、一人一人姿形がまったく違うのだ。

この鯉エビスを試みに3タイプに分けてみた。

- Aタイプ: 木造あるいは金属製で、表情や着衣がはっきり分かる。
- Bタイプ: 花崗岩かコンクリートでエビス様を形どっているが、表情や着衣の線はない。
- Cタイプ: 木製で、行商人のような風貌。細身で若作りなエビス様。大黒天とセットの場合が多い。

笑顔が暑苦しいAタイプは、どれも概ね表情や形が似通っている。ところが、それ以外のタイプでは、同じタイプでもその姿形は十人十色なのだ。もともと自然崇拜というのは具体的な信仰対象を持たないものだ。今回集めたものは、地域的に見てもそれぞれが何ら関連性を持たないよう見えた。全体のほんの一部しか紹介していないが、屋久島に関して言えば、恐らく「エビス様」と言えど



宮之浦エビス (B)

も、素材や形はどうでもいいのだろう。それにしても、皆いい雰囲気を醸し出している。

### ★エビスドン今昔(おわりに)

屋久町郷土誌 (1994) によると、集落ごとに、エビスドンにまつわる習慣や、豊漁を祈願するお祭りに関する記述がある。

- 原・表生: 集落ごとに魚初穂を供える習慣があり、船出前や漁のあとは、必ずエビス様に魚を供え、魚を捕らせて下さいと祈った。
- 栗生: トビウオ祭り。八十八夜、エビス様の前で



原エビス (C)

各自持ち寄った弁当を広げ、宴の後老女が波打ち際に立ち、紅白の布切れを打ち振ってトビウオを招いた。

- 中間: 浦祭りほか。

村じゅうの人々総出で大漁に賑わった時代や、お祭りの様子を思い浮かべると、皆が語らう輪のそばで、森の精「こだま」のように、そっと微笑むエビスドンが見えてくる。

しかし、これらは郷土誌編纂時に生存していた担い手たちの遠い日の記憶にすぎない。現在は、集落の召集により、義務的にエビス参りが行われる程度で、これらの習慣や祭事は消滅してしまった。



中間エビス (C、左右は大黒様)

第一次産業が下降線の一途をたどっている昨今、漁業の低迷とともにエビスにまつわる慣習も衰退していった。私が、お供えをするわけでもなく、都合のいい時だけすがっていたエビスドンの笑顔には、実は漁民と栄枯盛衰を共にした深いシワが刻まれていたのだ。

今もやさしく微笑み、海を見つめるエビスドン。原のエビスドンは年1回、彩色をやり直して大事に祠ってある。しかし、大半はお供えがしてあるくらいでひなびた感じは否めない。かつて、漁船が入り江を埋め尽くし、エビスドンの前に人々が殺到した時代は過ぎた。自然に生かされていることが実感しにくくなっている昨今、その象徴である彼らはこのまま忘れ去られる存在なのだろうか? そんな寂しい思いを残す、屋久島エビス曼荼羅だった。



一湊エビス (B)

# ヤクシカの角ってどんな形？

市川 聡

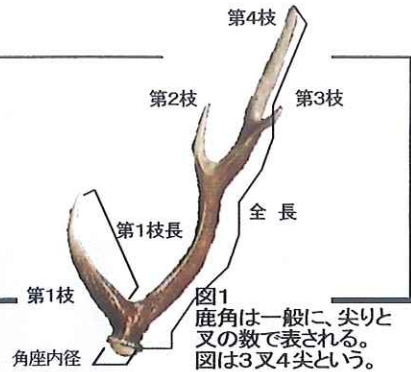


図1 鹿角は一般に、尖りと又の数で表される。図は3又4尖という。

## はじめに

屋久島に棲むシカは、ニホンジカ (*Cervus nippon*) の亜種としてヤクシカ (*C.n. yakushimae*) と呼ばれている。

このヤクシカの特徴としてこれまでいわれてきたのは、

- 1) 日本のシカの中では最も小型 (阿部他, 1994 ; 今泉, 1960)。
- 2) 角は第1枝が極めて短く、多くの場合第4枝を生じない (今泉, 1960)。
- 3) 左右の角の開く角度が小さく、平行に近い (朝日他, 1984)。

などである。

ここでずっと気になっていたのが、上記2)の「角は第1枝が極めて短い」という記述である。これまで10年以上にわたってヤクシカを見てきたが、特段第1枝が短いと感じられるヤクシカを見たことがないし、通常は全体のバランスから見ても、第1枝は十分に発達していると見受けられた。

ところが昨年、放映された NHK の生き物地球紀行のマゲシカ (*C.n. mageshimae*) 特集で、なんとその第1枝が極めて短いシカが次々と画面に写し出された！そう、お隣の馬毛島のシカの角こそ、第1枝が極めて短いのではなかろうか？

ということでこの春4月、馬毛島調査隊 (隊長：市川、隊員：岡田愛) を組織し、シーカヤックを繰り出して、勇躍マゲシカの角拾いに向かったのである。

馬毛島探検については、また別の機会に紹介するとして、ここでは馬毛島で収集した角に、既蔵のエゾシカ (*C.n. yesoensis*)、ホンシュウジカ (*C.n. centralis*)、ツシマジカ (*C.n.*

表1 今回用いた鹿角リスト(本数)

	ヤクシカ	マゲシカ	ツシマジカ	ホンシュウジカ	エゾシカ
1尖	2				
2尖	1				
3尖	12	10			
4尖	2	6	1	1	3
不明	3	10			
総計	20	26	1	1	3

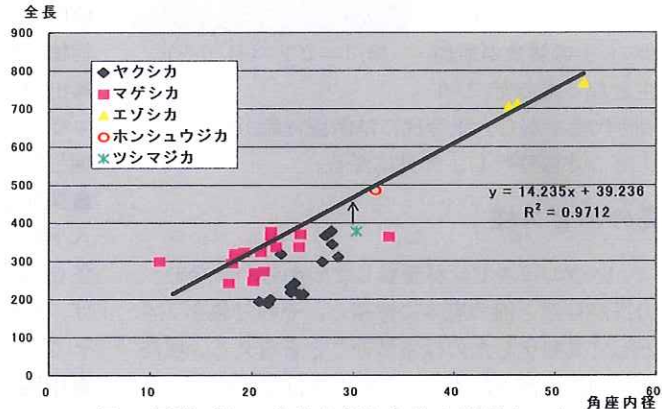


図2 亜種ごとの角座内径と全長の関係 (mm)

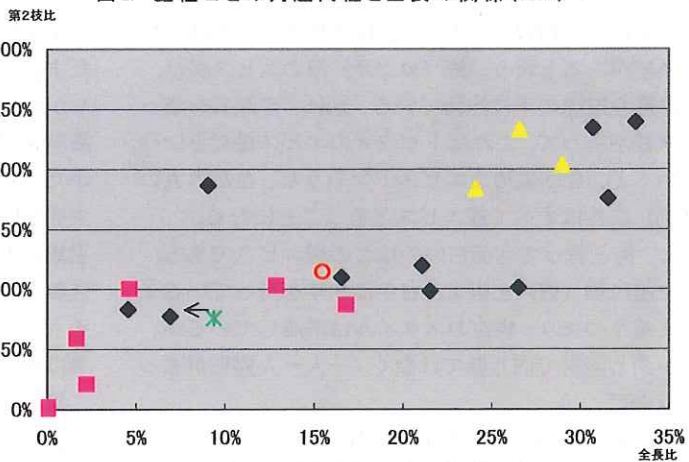


図3 全長及び第2枝に対する第1枝の割合

*tsushimaae*) 等の角もまじえ (表1)、ヤクシカの角の特徴を描き出した。

## 1. 角の全長と角座内径の関係

YNAC 所蔵の鹿角の全長と角座内径の関係を亜種ごとにプロットしたのが図2である。

ここでエゾシカは知床産、ホンシ

ュウジカは大台ヶ原産のものである。ツシマジカの角は残念ながら第3枝と第4枝の分かれ目あたりまで齧られていたため、正確な全長を測ることができなかった。実際の全長は4~5cmほど長いものと考えられる。

この図から言えることは、エゾシカはやはり角座内径も長さもダントツで大きく、ホンシュウジカがこれに次ぐ。ヤクシカ、マゲシカは長さ、太さともに最小のグループに属する。

ここで島嶼型ではないエゾシカとホンシュウジカのデータをもとに、回帰直線を引いてみた。すると角座内径と長さとの間には、強い相関が見られた。ツシマジカは実際の長さから推定すると (←方向に移動)、かなりこの直線に近づいてくると考え



られる。またマゲシカのグループもほぼこの直線上に分布していることがわかる。

ところがわがヤクシカは、この直線から明らかに下方に分布している。つまりヤクシカは他亜種の角の長さや角座内径の関係からみると少し特異な位置にあり、長さに対してやや角座が大きいということが、特徴として浮かび上がる。

## 2. 第1枝の長さについて

次に最も気になっている第1枝の長さについて見てみよう。

まず今泉(1960)によって記載されている「第1枝が極端に短い」とはどういう意味であろうか？

ヤクシカはもともとニホンジカの中では最も小型の亜種と言われていることから、当然角の大きさも小さく(図2)絶対値で見れば、他の亜種に比べて、第1枝が短くても当然である。これは第2枝、第3枝も絶対値で見れば他の亜種より短いということの意味するに過ぎない。

ではここであえて「第1枝が極端に短い」と記載されているのは、全長に対してまたは第2枝等他の枝に対して、相対的に第1枝が極端に短いということを言っていると解釈できる。

そこで全長及び第2枝に対する第1枝の割合を亜種ごとに比較したのが、図3である。ここでは第1枝及び第2枝の比較を行ったので、3尖以上の角についてのみ比較した。

エゾシカは全て4尖で、全長に対する第1枝の割合(以下全長比)はおおむね25%前後と全長の1/4程度、第2枝に対する第1枝の割合(以下第2枝比)は、200%前後と2倍以上になっている。全長比、第2枝比とも最大のグループであり、第1枝が大きく張りだしたような枝振りの角となっている(図4)。

ホンシュウジカは1例に過ぎないが、全長比は15.4%とエゾシカに比べて小さくなり、第2枝比でも114.9%と第2枝に比べてやや長いといった程度となる。このため全体的に枝の長さが揃った感じとなっている(図4)。

ツシマジカも1例に過ぎないが、全長比は9.4%と前2種に比べると更に短くなった。先に述べたようにこの角は先端が欠けていたので、全長比は実際にはもう少し小さくなる(←方向に移動)。また第2枝比では



図4 亜種別角写真

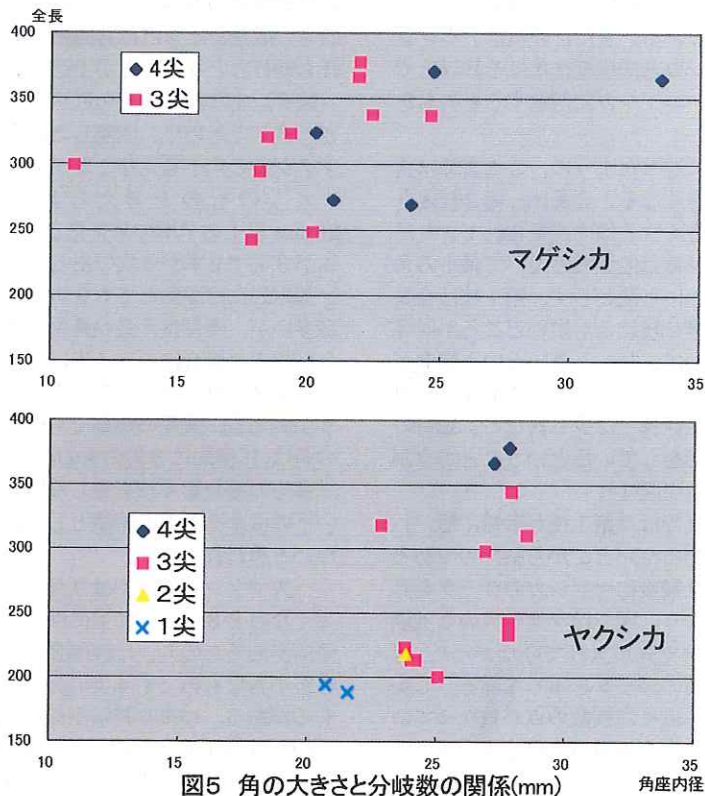


図5 角の大きさと分岐数の関係(mm)

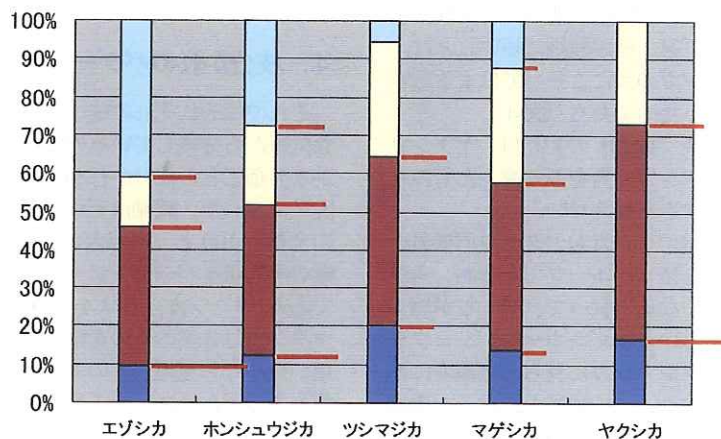


図7 亜種別分岐パターンと枝長

76.3%と第2枝よりも第1枝がやや短くなった。枝振りの見た目は、ホンシュウジカとマゲシカの間と言ったところであろうか(図4)?

ここまでエゾシカ→ホンシュウジカ→ツシマジカと角の大きさが小さくなる(図2)に従って、第1枝が小さくなり、第2枝が相対的に大きくなる傾向が見受けられた。

さていよいよヤクシカであるが、データにかなりのばらつきがあるが、全長比では15%以上のものが多く、ホンシュウジカより大きくなるものが大部分であり、中にはエゾシカをも上回る角もある。

一方第2枝比では、大部分100%を超え第2枝に比べて第1枝が長くなっている。またこの値は、ホンシュウジカと同程度またはそれ以上であり、エゾシカに匹敵するものもある。

先に述べたように、ここまでは角が小さくなると全長比、第2枝比とも小さくなる傾向が見られてきたが、ヤクシカは他亜種と比べて最小の角を持つにも関わらず、第1枝は全長比、第2枝比とも短いどころか同等あるいは、むしろ長いという傾向が浮かび上がった。ここでもヤクシカは、他亜種とは少し異なる、独特の角の形をしているということがうかがえる(図4)。

それでは「第1枝が極端に短い」とはいったいどこから来たのであろうか?最後にマゲシカのデータを見よう。図ではマゲシカの3尖以上の角で先が欠けていなかった14本の角のデータを示してある。しかし0%近くに複数の点が重なっているため、点の数が少なく表示されている。つまり、マゲシカは大部分が第1枝は痕跡程度にしか伸びないのである。第1枝が伸びる場合でも、第2枝と同程度が関の山であり、まさに「第1枝が極端に短い」とは、マゲシカの角にこそ当てはまる形容詞だったのである(図4)。

今泉(1960)の記述は、ヤクシカとマゲシカの角を取り違えたものと結論せざる終えない。

なおマゲシカもヤクシカ同様最小の角を持つグループであるが、角が小さくなるに従って、第1枝が短くなるというエゾシカ→ホンシュウジカ→ツシマジカに見られた傾向に準じており、この独特な形はその極端な例とも考えられる。

### 3. 角の成長と枝分かれ数

もう一つの特徴とされる、ヤクシカの角は「多くの場合第4枝を生じない」と言う点はどうか?角の成長と枝分かれの数の関係について、図5にまとめた。

ヤクシカは、角が長くなり、かつ角座が太くなるに従って、1尖から2尖、3尖と枝分かれが増えてくる。しかし角の太さは、30mmを超えることなく頭打ちとなる。

ここで角の太さの指標として用いた角座内径は、いわば頭骨と角の接点の径である。鹿の角は毎年生え替わるが、角の生え口となる角座の接点は頭骨そのものが変形したもので、頭骨の成長が止まれば角座内径の成長も頭打ちとなることが予想できる(図6)。すなわち頭打ち近くまで太さの達したものは、成熟した大人のヤクシカの角と考えることができる。

大人のものと考えられる径26mm以上の7本の角を見ると、5本が3尖で2本が4尖である。

基本的には成熟しても3尖のものが多く、条件良く長い角を作ることができた場合にのみ4尖になるというヤクシカの角の成長パターンがうかがえる。実際の観察でも成熟雄の角は、圧倒的に3尖のものが多く、「多くの場合第4枝を生じない」というのはヤクシカの特徴として問題ないと思われる。

一方マゲシカは、やはり角が長く太くなると3尖から4尖に移行する傾向があるものの、比較的長さ、太さが小さなものでも4尖に分岐するものがある。つまり特別長くなったものだけが4尖となるヤクシカとはことなり、マゲシカは基本的に4尖に分岐する傾向を持っていると推察できる。

### 4. 枝分かれのパターン

それではそれぞれの枝はどのような位置から分岐しているのであろうか?亜種ごとの枝分かれパターンを図7に示した。縦軸はそれぞれの角の全長を100とした場合の、分岐位置の平均値をパーセンテージで示してある。ヤクシカ以外は4尖のもの、ヤクシカは3尖のものを標準として用いた。なお亜種ごとの典型的な枝振りを示すために、全長に対するそれぞれの枝の平均的な長さを横棒で示した。

エゾシカ、ホンシュウジカ、ツシマ

ジカ・マゲシカと角が小型化するに従って、分岐位置が先端方向にずれてくる傾向が見られる。

大きく重い角を作るエゾシカでは、重心の低い形が、安定した角形なのであろう。

ツシマジカとマゲシカは、比較的似通った枝分かれのパターンを示すが、ツシマジカは、角の第1枝が高いところで分岐することが特徴とされている。ここでは1例ではあるが、確かに他亜種と比べて第1枝の分岐位置が高い傾向が見られた。

ヤクシカは、多くの場合第4枝が分岐しないという独特の形をしている。分岐パターンでは、第1枝と第2枝の間が、特に長いという特徴が見られた。

### まとめ

以上を総合すると、ヤクシカの角の特徴として浮かび上がったのは、

- 1) 日本のシカの中では最も小型。
- 2) 長さの割には、角座が太い。
- 3) 第1枝は他亜種と比べて、同等もしくはむしろ長い。
- 4) ほとんどの角は3尖どまり。
- 5) 第1枝と第2枝の間が長い。

といったところである。

これまでの今泉の古い誤った記載に基づいてなされている、島内の展示施設のヤクシカに関する記述は、これらに基づき見直す必要があるであろう。

### 引用文献

今泉吉典, 1960. 原色日本哺乳類図鑑 保育社

阿部永ら, 1994. 日本の哺乳類 東海大学出版会

朝日稔ら, 1984. 屋久島原生自然環境保全地域調査報告書



図6 角座部分の頭骨の変形

# 屋久島の街路樹

藤村 早苗

## 1. はじめに

屋久島を車で走っていると次々に出てくる街路樹。しかし県道沿いには自生の木々も多く、その存在が薄い。私も注意して見ない限り自生の木々と区別をしなかっただろう。人の手で作られた「街路樹」という世界で生きている木々はどのようなものか、調べていくと面白くなってきたので、今回紹介することにした。

## 2. 街路樹の働き

街路樹は、慶応3年(1867)「横浜居留地改造及競馬場墓地等約書」に基づき開通した馬車道に植えられたのが日本での始まりと言われており、現在は主に交通の安全性を高める目的で植えられている。車道と歩道の間に街路樹があると歩行者は前方や左右に注意する必要が減り、視界が広がる。またドライバーにとっても歩行者の車道への立ち入りや横断の不安感が緩和され運転の快適性も増進される。それ以外にも騒音の緩和、防災および避難路の形成、大気汚染物質の吸着・吸収にも効果があると言われている。また、樹木の作り出す木陰は夏の日差しを防ぎ、歩行を快適にしてくれる。

## 3. 屋久島の街路樹

2001年6月5日、重たい雲の広がる空の下、街路樹の生活を覗くため車を走らせた。コースは宮之浦より時計回りで進む。

屋久島の街路樹はひとつの植樹帯に数

本しか植わっていないケースが多く、植樹帯もあまり多くない。今回は屋久島の中でも街路樹の植樹帯が比較的はっきりしている宮之浦～安房までの区間に限定し、同種の植物が連続して出てきているポイントを紹介する。植樹帯の配置、街路樹の種類などは鹿児島県屋久島合同庁舎の資料を参考にした。

### 【宮之浦】

YNAC事務所の前を走る県道にはクロガネモチが整然と並ぶ。クロガネモチはモチノキ科モチノキ属の常緑の高木で、本州より南、四国・九州・沖縄でも街路樹として利用されている。ここではそろそろ花の準備が整いつつある。白く控えめな花が葉の付け根に咲き、そして冬になると小さく赤い実をたわわに実らせる。この並木は夏、木陰を作り歩道を涼しく快適にさせ、また北西の季節風が吹きつける冬にはこの赤い実が町を明るくしてくれる。

クロガネモチの下には植樹帯によってサザンカとサツキ、そしてマメツゲが植

えられている。サザンカとサツキは屋久島に自生しているものと感じが違うので、園芸品種と思われる。宮之浦港の辺りから屋久島高校の辺りまではサザンカとサツキが植樹帯によって交互に出てくる。6月初旬の今の時期、サツキは朱色の花をつけていた。マメツゲとはイヌツゲ(モチノキ科モチノキ属：萌芽再生力が強く刈り込みにもよく耐え、公園などで動物の形に刈り込まれている低木)の園芸品種で、イヌツゲよりもふちのそり返った丸い葉をつける。マメツゲは屋久島高校より先に植えられている。

### 【楠川】

宮之浦から南へ車を走らせていると海が見え、水平線の向こうには青い種子島が浮かぶ。海の風にあおられて大きな葉の先を揺らしているのはヤシ科ピロウ属の常緑の高木、ピロウだ。南国のムードを醸し出す樹木だがここでは数が少ないためか、周りの照葉樹に溶け込んでいる。また、ここにはハマヒサカキも植えられている。ツバキ科ヒサカキ属で常緑低木



安房：ピロウとサツキ

で、海岸性の植物。潮風や台風に強い葉は小さくつやがあり美しい。屋久島では「ケサンキ」と呼ばれ、生垣などでもよく目にする。

少し先に行くと、ネズミモチが白い花をつけていた。モクセイ科イボタノキ属の常緑の小高木で、円錐状に小さな花をたくさんつける。比較的乾燥に強く、苗

木の生産が容易で刈り込みに強いので、公園や生垣に利用される。安房川でもよく目にし、手の届く範囲に出てきてくれるのでカヌーの上からよく観察できる。

ネズミモチの下には丸く大きな葉のツブキが植えられている。

### 【小瀬田】

集落の入り口にハマヒサカキが並ぶがどの木もあまり元気が無い。

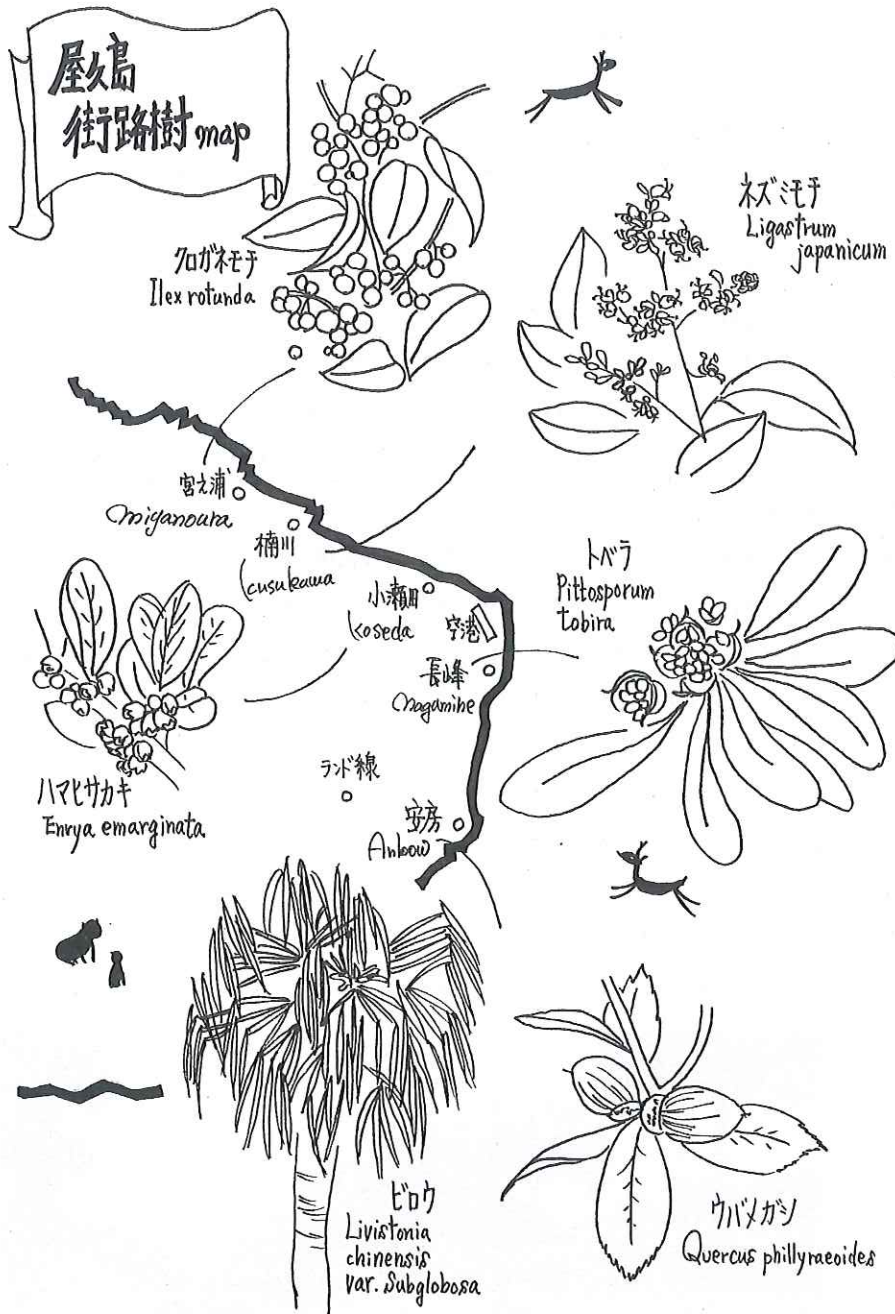
彼らはそもそも海岸に生えているのだが、生育立地に持続的な水分供給のある場所を好むようだ。地形的にくぼ地だったり持続的な湧き水があるような場所がいいらしく、意外と好みにうさじようだ。

その先には墓地があり、いつもきれいに花が飾られている。とても色鮮やかで迫力のある墓地。お客さんと車に乗っていると、この墓地を見るやその美しさに圧倒され「お墓参りはお盆とお彼岸のときくらいしかいってないわ…」とつぶやく声が聞こえてくる。

### 【長峰】

空港を過ぎてしばらく車を走らせると気持ちのよいストレート道路が出てくる。ついスピードを出したくなるが、ここの植樹帯には街路樹の名前のプレートがあったりして親切なのである。

まずトベラ、その下にツブ



ブキが植えられている。トベラはトベラ科トベラ属の常緑の低木で、里では良く見かける樹木である。葉は楕円形で、ふちは外へ反り返る。太陽の光を浴びると眩しいくらい反射し、まさに「照葉樹」と呼ばれるにふさわしい立派な葉を持つ。5月下旬、安房川では花が終わり、実をつける準備が整いつつある。丸く黄色い梅干の種ほどの大きさの実の中に、オレンジ色の小さな種が入っている。色鮮やかでつい触れてみたくなるのだが、触れると大変！種がネバネバしてなかなかとれないのだ。

私はこのトベラとツワブキの植樹帯はかなり感じが良いと思った。花もないし実もついておらず色合いはかなり落ちているのだが、2種類の葉の大きさが全く違うため、光の反射が違い面白い。

先へ行くと背の高い木がトベラとツワブキの中に等間隔で植えられている。プレートを見ると「ヤブツバキ」とある。ツバキ科ツバキ属の常緑の高木で本州から南に分布している。屋久島の森へ入ると「リンゴツバキ」というツバキが出てくる。これはヤブツバキの変種で、違いは実の大きさにある。リンゴツバキは野球ボールくらいの大きさで真っ赤な実をつけ、それがまるでリンゴのようだからその名前がついたと言われている。

#### 【安房】

安房にはたくさんのピロウ、そしてその下にはサツキの朱色の花が咲いている。パッと明るい町並みに南国の雰囲気が出る。また、生垣にハイビスカスが揺れていたりするとなおさらだ。

南国ムードは安房橋まで。この先は照葉樹の街路樹に変わる。まず安房川側の車道にはウバメガシが出てくる。ブナ科コナラ属の常緑の低木～高木で、硬い葉

を持ち乾燥に強い。保水力が低く潮風がよくあたるような場所でも元気よく生えている。材も硬いので備長炭として有名な木炭の原料である。また、反対側の車道にはタブノキが出てくる。クスノキ科タブノキ属の常緑の高木で、日本各地の暖帯林に多く、本州より南の地域で街路樹として利用されている。タブノキはなんとと言っても新芽の季節が素晴らしい。赤く直立した新芽は周りの木々のものよりもひときわ鮮やかで、カヌーに乗っていると必ず「あの赤い花は何ですか？」と質問をうける。いずれの木にも木製で手書きのプレートが掛けてあり、しっかりと合っている。低木にはサツキや芝が植えられている。

#### 【屋久島公園安房線／通称：ヤクスギランド線】

屋久島は6月4日に例年より遅く梅雨入りした。これから雨の季節かと思うと気持ちも盛り下がってしまうが、この道路は今からが旬である。毎年素晴らしいアジサイのトンネルが出来上がる。鞠のような大きなアジサイが屋久杉自然館までの道を彩り、雨の季節を楽しませてくれる。残念ながら調査に行ったときは準備中だったらしく、まだ白い小さな蕾がついている程度だった。しかしここはアジサイだけでなくサツキも植えられてい

るので、今はサツキに彩られていた。

#### 4. まとめ

屋久島の街路樹はほとんどが常緑の広葉樹で、里のまわりでよく見かけるものも多かった。屋久島の街路樹の存在が薄い理由は里のまわりの樹種と変わらないからなのだが、それによりまわりの景色となじみ、全体に落ち着いた雰囲気となっていたのだ。常緑広葉樹の街路樹は一年を通してあまり変化が無いように思われがちだが、花も違えば実も違う、また光の反射も違い、控えめだがそれぞれに表情がある。屋久島を訪れた際、必ずしも利用する県道。屋久島の旅のプロローグとして、県道脇のこの控えめな街路樹達から楽しまれてはいかがでしょうか。

#### (参考文献)

1. 渡辺 達三著：『「街路樹」デザイン新時代』、裳華房（2000）
2. 林 弥栄編：『日本の樹木』、山と溪谷社（1999）
3. 岡山理科大学 総合情報学部 生物地球システム学科：植物生態研究室 ホームページ「植物雑学事典」



長峰：トベラとツワブキ

# 正シイ野糞ノススメ。

= It's a precious entertainment! =

鷺尾 紀子

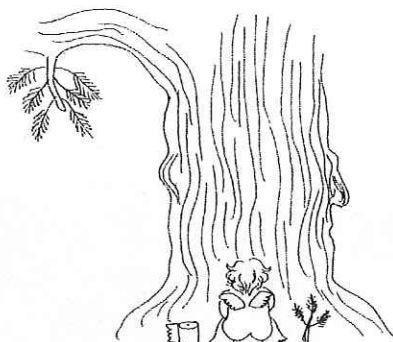
私はどうも、山の中にある野外トイレというものが苦手である。というよりも、はっきりと、嫌いである。なにも、ぼつとん便所が嫌いだといっているのではない。自然の中にどうやっても溶け込むことのできないあの異空間な物体がきらいなのである。「4月から研修生として屋久島にやってきたばかりの新人がいきなり何を書き出すんだ?」といわれそうだが、私は山小屋にある野外トイレほど不潔なものはない、と思っている。先日行った高塚小屋のトイレなんて、羽虫で便器が見えない程だった。トイレで虫がわき、うんこにたかったハエ達が自分たちの食料にとまったとなれば、これはけっこう不幸なことではないか。そして、なによりもあのせまい、暗い、くさい空間がよろしくない。それに比べてまったくの屋外での用足のなんとすばらしいこと。その瞬間、目の前に広がる森も空も空気も全部我が物にしてしまえるのである。はっきりいって、贅沢である。人は食べなければ生きていけない。食事が毎日の営みであるからこそ人は工夫を凝らし、楽しく充実したものであろうとする。ならば、同じ毎日の営みである糞尿も、楽しく充実したものにしてはダメですか。ということで、岡田愛と共に YNAC・男闘呼組と市川氏に呼ばれながら、「まったく関西人は…」と小原氏に言われながら、そして松本氏のダジャレに大喜びしながらも毎日、海・山・川でがんばっております、ペーパーの研修生・鷺尾紀子。栄えあるデビュー作をこの偉大なテーマ「正しい野糞」について取り組んでみました。

では、どのようなキジ撃ち、お花摘み、ガーデニング、(すべて野糞を表す隠語。)が美しく、スマートであるか わっしー流「野糞三原則」をお教えしましょう。

## 一. 場所選びはゆっくりと時間をかけて行う。

うんこは朝の神聖なお勤めです。決してあせってはいけません。ゆったりとプライベートを楽しめる場所を選びましょう。さあ、いざ排便! さらば、我が友よ! という時に「おっと、ごめんよ。」などと

あなたのおしりを他人に見られてしまうことのないように、キャンプサイトから十分離れた岩陰・木陰で、できれば景色のよいところを探しましょう。偉大な自然の中で行う用足しは、自宅のトイレで新聞を読みながら行うよりもずっと落ち着き、さらになんだか哲学



的な思考を思い巡らせることができます。そして、これは大切なことですが、場所選びの際、できるだけ水場から離れた場所をさがしましょう。というのは川にはバクテリアが少なく、もしうんこ成分が流れてしまってもそれを分解しきれない、すなわち汚染されやすいからです。もし場所的に水場から十分に離れるのが無理であるならば、できるだけ高所の大雨の時増水しても水に浸かることのない場所を選びましょう。あと、くれぐれも場所選びに夢中になってしまつて道に迷っちゃった、ということのないように。

## 二. 穴を掘って実行すべし。

当たり前だがうんこはにおう。半径5m以内に入った時点で、大抵「これはもしや…」というおいに気がつく。そして、残念なこと



にたいいていの場合においの犯人「うんこ」をみつけてしまう。しかもティッシュというなまなましいおまけつきで。これは大惨事です。我が聖域(サンクチュアリ)を土足ならぬ、まさにくそで踏みじられるとはこのこと。思わず、「くそーっ!!!」叫んでしまうのです。人は自然の中に足をふみいれたら、すべての物に対し、紳士・淑女でなくてはならない。紳士・淑女たる者、決して周りを不愉快にはしてはいけない。つまりは、後を残してはいけないのだー!

それと、もうひとつ。穴を掘る最大の目的であるが、それは一刻も早くうんこを自然へ、つまりは土へと戻すためである。この穴は「キャットホール」と呼ばれおり、深さは15cmから20cm(屋久島の場合は5~10cm)で十分である。排泄物を分解するにもっとも効果的な分解層と呼ばれる土壌は上部の20cm以内にあるからだ。こうすることによって、うんこは早く分解されるのである。加えて、動物との接触を防ぎ、羽虫が病原体を人間の食料まで運ぶのを防ぐことができるのである。もちろん、穴は使用したら埋めましょう。

## 三. トイレトペーパーは持ち帰ろうね。

これは意見が分かれそうで、なにもそこまでしなくても…と思うかたもいらっしゃるが、私はトイレトペーパーは持ち帰って当然だと思っている。やはりうんこに比べると分解される速さが格段におそいから。というのは、うんこは一度、「お腹」という浄化槽を通過してこの世に排出されているのである。一度もそのような物を通過していないトイレトペーパーと比べると、どちら



が早く自然に帰るか、皆様はもうおわかりですね。

最近出回っている水性ティッシュについては、なかなかやるな！という感じで従来までとくらべると、早く土に戻っているようだが、私的にはやはり自然の中にできるだけ人工物は残したくないな一と思うのである。だったら燃やせばいいじゃないという意見もそうだが、場所は山の中である。どんなことがきっかけで山火事がおこるとも限らない。燃やすのはやめましょうね。女性の場合、生理用ナプキンは当然の様持ち帰るのでありますから、そんな1泊や2泊分のトイレトイーパーなんて、たいしたことではないでしょう。男性はおしっこの際、あきらかに女性より便利な思っているんだから、これくらい気持ちよく持って帰りましょうね。

さて、ではどのように持ち帰るのがベストなのか。一例として、私がやっている方法を紹介しましょう。それはずばり、ジップロックです！使用済みの紙をまずスーパーの袋にいれ、それをジップロックしちゃうのです。こうすれば、外から中身は見えないし、においもシャットアウト！

さて、ここで例外を一つ。それは海で行う用足しである。海は広いな大きな、で山とは別世界の生態系があるのです。川に比べると、ぶっちぎりで多くの分解者、バクテリアちゃん達が生息しているのです。ということで、今のところ、うんこは海に流しても大丈夫とされています。海岸で行う場合は満ち潮の時に波にもっていかれる場所で実行しましょう。そして、トイレトイーパーはやはり持ち帰りましょう。

私の海でのすばらしい体験談(自慢話)をお話しましょう。私は屋久島にくる前はカナダのブリティッシュ・コロンビア州でアウトドアプログラムなるものを学んでいたのですが、授業の一環でバンカーアイランドの辺りでシーカヤックをしていた時のこと。私は夜寝る前に、どーしてもうんこがしたくなり、ヘッドランプをつけ、トイレトイーパー片手に闇の海岸に出た。おり悪く丁度この時は満潮でいいあんばいの場所を見つけることができなかつた。しかたがないので、辺りにちらばっている牡蠣の貝殻を集めて敷きその上用を足した。牡蠣の貝殻ごと私は自分のうんこを海へ“ポチャン”と落とし、使用済みの紙をジップロックし、ズボンをあげてさあテントへ帰ろうと用を足す間消しておいたヘッドランプをつけたその時、私はいくつもの光る目を海の中に見つけたのである。光る目の正体はなんと、15cmはあろうかというエビ達であった。しかも1匹、2匹ではない。沢山のエビ達がいましがた私が落としたうんこを求めて集まってくるのだ。私はこの光景をみながら自分自身がこの海の世界に繋がって組み込まれているのを感じ、偉大な母なる海への敬意を表し、なんとも満ち足りた気分がテントへと戻ったのだった。そして忘れず、次の日に一緒にシーカヤックで旅しているクラスメート全員に私のうんこ話を披露したのである。クラスメートのグレッグは「ぼくにはそんなエキサイティングな事はおきなかった。」とたい

そううらやましがっていた。

この“海ではうんこOK”もここ最近、事情が変わりつつあるようだ。そう、海があまりにも汚れすぎてしまっているのだ。“海への垂れ流しは一切禁止。排泄物はすべて持ち帰りましょう。”となるのもそんな遠い未来のことではないでしょうね。

排泄は人間にとって、あたりまえすぎる当然の営みです。くさい、汚い、年頃の娘がこんな話をえんえんとするなんて…といって目をそらしては決していけないのです。現代の水洗トイレでは自分達が行った事実をまるで何もなかったかのように、まさに一瞬で水に流してしまふ。これは非常によろしくない。一方、自然の中では自分のうんこを、なかったもんねーと水に流すことはできません。これを機会に自分の中からでたこの物体と向きあってみるのもいいのではないのでしょうか。星野道夫氏も言ってます。“あたりまえの話だが、大自然の中での用足しはほんとうに自然だ。これ以上のすがすがしい用足しは絶対にない。現代人の中でどれだけの人間がこの快感をしってるだろうか。僕たちの文化というもの、自分達の排泄物をできるだけ見ないように出来上がってる。つまらないことかもしれないが、そんなことからさえも、僕たちはなにかを失っている。”ってね。

山を楽しむ、川を楽しむ。野糞は大自然の中における偉大なエンターテイメントであります。この喜びの営みを生かすも殺すも自分自身である。故に、おおいにこだわっていただきたい。そして、しつこいようだが自然の中で人は紳士・淑女でなくてはならない。自分のうんこのしまつという最低限以下のマナーもまもれないような方は「いやー、自然っていいですね。」なんて言う権利はないのですぞ。

最後に、この“野糞三原則”は、あくまでも私のスタイルです。このエッセイを読んで、ちょっと一言物申したいという方、ぜひ私にあなたの野糞スタイル、いやいや野糞哲学をお知らせください。あと、今思い出しても、“うぶぶ…”と思わず笑ってしまうような野グソ体験談をお持ちの方もぜひお教え下さい。



私の野糞デビューの地・カナダ！いい景色でしょう。

## Calendar

2001年

- 1/27~2/5 市川 タスマニアツアー 講師 (岡田愛 参加)  
2/18 第1回 自然クラブ2001 破沙岳参り  
2/27 松本 運輸省第2回エコツーリズム研究会に出席  
3/10~12 松本 伊豆安良里で「海辺の環境教育フォーラム」海のエコツアー事例発表 (ひろみ 参加)  
3/10~12 小原 レスキュー3講習を受講しロープレスキューの国際資格を取得  
3/14~16 松本 妙高で「自然体験活動指導者青年ミーティング」講師 (ひろみ 参加)  
3/18 第2回 自然クラブ 鈴川の滝  
3/17~18 松本 国立民族博物館主催「島嶼における自立的観光研究会」事例発表  
3/23 松本 運輸省第3回エコツーリズム研究会に出席  
4/15 第3回 自然クラブ 楠川前岳参り  
4/16~19 市川・岡田愛 シーカヤックにて馬毛島調査  
4/23 松本 ガイ連協総会で第2期会長に選出される(小原は理事)  
5/13~16 風の旅行社・幹部3名でYNAC エコツアー視察  
5/14 藤村 マウンテンバイク初ツアー  
5/20 第4回 自然クラブ 二賀野の浦で浜でばい  
5/22 松本 屋久島観光協会総会において理事に選出される  
5/28 市川 長崎県自然保護担当者会議でエコツアーについて講演  
6/17 第5回 自然クラブ 石塚山参り・オオヤマレンゲ鑑賞  
6/22,23 小原・持原・鷺尾 口永良部島マルバサツキ開花調査  
6/22~27 岡田愛 秋の有隣堂対馬ツアーに向け現地調査  
6/24 小原 環境省自然に親む集い「落滝」講師

## Library

執筆記事

- ★生命の島 55号「屋久島物語」人が人であるために  
長く連載を続けていた松本のこのコーナーもいよいよ最終回。卒業です。本号では表紙写真・巻頭カラー4p「海の中の屋久島の自然」を担当しました。
- ★学研 島の学校 第二章島を知る ホンモノの自然をめぐる
- ★日本アウトドアネットワーク機関紙「空へ」12回連載  
第27号 巻頭言 21世紀の幕開けに 2000/12/31  
第28号 巻頭言 曇りなき眼で 2001/3/31  
第29号 巻頭言 屋久島の四季 春編 2001/6/31 生命の島
- ★マガジンハウス 鳩よ 2001/4月号  
特集 田口ランディ 魂を救え「で、その人はだれ？」  
癒しの森 M氏は、… (以上松本)
- ★森林学習におけるエコツアーの重要性 森林科学2001,31:22-29  
屋久島におけるエコツアーの現状と我々の考えを詳しくまとめました。まだ別刷りあります。(市川)

## Contents

「訪問客」とともに	1
イカ的愛	2
「もののけ姫」考	4
ミニコラム 森の分解者	5
屋久島えびす曼陀羅	6
ヤクシカの角ってどんな形	7
屋久島の街路樹	11
正しい野糞のススメ	14

★JEAN 通信 94号 命輝<屋久島という島から  
海辺のゴミ拾いをやっているボランティアグループの機関誌に、  
屋久島とYNACの活動を紹介。(ひろみ)

掲載記事

- ★週刊宝石 2001/1/25号「縄文の島に生きる」  
★JTB 旅 2001/5月号 遊学のススメ 座談会「今、自然案内人のいる旅の面白さとは？」松本・NEOS 高木・ホールアース広瀬・星野  
リゾート星野;司会 JTB 小林英俊  
★船社 BOAT CLUB 2001/4月号  
海を守る人々 その6 豊かな生態系のメッセンジャー エコツアーの感動創造空間  
★ダイビングワールド 2001/6月号  
ダイブ&エコツアーの実態 YNAC 紹介

## 編集後記

- 14年屋久島の海を潜り続けてもまだまだ未知の部分がたくさんある。なかなか奥が深いですね。(ま)
- オオヤマレンゲ、咲いてましたよ。屋久島も奥が深い。(お)
- MTB で真夏の西部林道を駆け抜けます。(さ)
- シャクナゲ、ツツジ、オオヤマレンゲ、五月雨の美しさを今年知りました。(も)
- 連日うだる様な暑さに身悶えている。そんな体を海に浸す「あの瞬間」が大好き。さあ、ひろみの夏が始まるさ〜！(ひ)
- 屋久島に来て早や2ヶ月。毎日全力で遊び、全身で感動しています。がんばりませー(わ)
- YNACの夏、オカダアイの夏(あ)
- 今年は春からのデスクワーク続きで、ストレスがたまりまくり。これですと事務仕事から開放だ。おい！俺にもカヌーやらせろ。(い)

## YNAC通信(ワイナックつうしん) 第13号

発行日: 2001年7月1日

発行: 南屋久島自然活動総合センター

住所: 〒891-4205 鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦368-21

TEL 09974-2-0944 FAX 09974-2-0945

E-mail: forest@ynac.com Url: http://www.ynac.com/